破壊された土地・建物の再生への努力の成果は、現在の地球環境問題の解決のための大きな指針作りの学習の機会となった。同時に地球環境コンサルタントとして活動する資質を磨くことに繋がっていく。

愛知学芸大学附属春日井小学校の教育は、人間・石黒、そしてコンサルティング業務の原点になったといえる。

厳格なる父とは一体化

父・兼次郎は腕のいい棟梁だった。石黒は、「（大工道具の三種の神器の一つである）手斧（ちょうな）の音は、父にとっては（石黒が好きな）音楽に等しい」「屋根の形を見るだけで内部の小屋組みがわかる」と兼次郎が話すのを、今でも鮮明に記憶している。

戦後の傷跡がまだ色濃く残る昭和21（1946）年には東本願寺の回廊を手がけた。

職人だけに寡黙な人、厳しい人。殴られたことも少なくなかった。

「父と私は一体化している。父の影響から逃れられない」と語る石黒が大学進学で建築を選んだのは、ものづくりを仕事とする父の背中を見ていた影響からかもしれない。父も息子が建築学科に進むことを喜んでくれた。

ただし、設計事務所をやるというときには、「そんな儲からない仕事を・・・。設計は道楽でやるもんだ」と反対されてしまう。尤も心から反対しているのではなく、「設計より他にいい仕事があるんじゃないか」という親心からの助言だったことは想像に難くない。決意の強さを知って、最後は「やりたきゃやれ」と折れてくれた。職人ならではの口下手なところがこのような突き放した言葉になったのだろう。本当は「頑張れ！」と後押ししてくれたものと理解する方が適切である。

のちに石黒がアメリカに渡るときには、渡航資金を出してくれた。寡黙であると同時に、当然だが息子のことを思う優しさも兼ね備えた父だったのである。

そんな兼次郎は100歳まで生きた。ちなみに母も100歳までというように、石黒家は長寿の家系である。

東本願寺での父兼次郎（前列中央）

ただ、兼次郎に対して意外に思ったことがある。それは、父が遺してくれたものの中に、19世紀イギリスを代表する美術評論家であるジョン・ラスキンの著作「この後の者にも」があったことである。

イギリスの評論家・美術評論家と日本の棟梁。果たしてどこに接点があったのか。あるとすればラスキンの代表的な著作で、建築に対する基本的な考えを7つの章に分けて解説した「建築の七燈」だろう。しかし「この後の者には」は経済学に関する書である。

「自分のあとの世代に何を残すかを常に考えてい